環境パートナーシップちば
だより
— つながれ ひろがれ —

Vol.34
編　集　環境パートナーシップちば
代　表　加　藤　賢　三
事務局　千葉市中央区中央港1-11-1
(財) 千葉県環境財団環境技術部
環境啓発ﾁｰﾑ
電　話　043－246-2180
ＦＡＸ　043－246-6969

環境シンポジウム２００３千葉会議をふりかえって
市民・行政・企業・大学の協働でより深く、より多彩に

環境シンポジウム千葉会議　実行委員長　　横 須 賀　靖

環境シンポジウム千葉会議は、今回、9回目の開催となりました。今回から、環境シンポジウム千葉会議実行委員会が単独主催者となり、本会のすべてを取り仕切ることになりました。

この新しい運営形態のため、実行委員会は5月に第1回を発足、運営体制の整備を図り、運営委員会・企画部会で立案・準備など実務を進めることにしました。

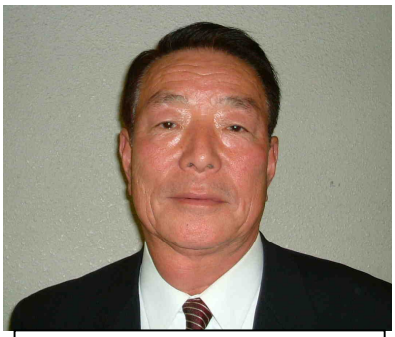
開催場所は、環境シンポジウム2002千葉会議と同じで、日本大学生産工学部のご好意により津田沼キャンパスをお借りし、市民・企業・行政・大学の四者のパートナーシップを一段と深める事が出来ました。

開催日は会場の都合で、10月4日、5日の2日間とし、10月4日土曜日13時から17時30分を第1日目としてシンポジウムの基調講演と概論を行い、翌5日10時から17時を第2日目とし、10時～15時30分を分科会として分科会に十分な時間配分し、15時40分からまとめの全体会を開催致しました。

分科会は、昨年の7分科会に対し、企業が日常行なっている環境保全活動を基に「企業の環境保全」をテーマとして第8分科会を加え、多くの企業が参加され我々市民や大学が知らなかった、ああ、こうゆう事もあったのかと云うような活動や総意工夫などの経過やご苦労が発表され、多くの方々から高く評価されました。

又、一昨年より加えた学生を中心に運営する第7分科会も定着し、次世代を担う若者がこうしてこのシンポジウムに参加する事は大切な自然環境を、大切な我々の財産として守ってくれるものと期待致します。

全　体　会　発　表


横須賀実行委員長

今年のもう一つの特色は、実行委員からの提案により、二日間に亘るシンポジウムを和らげる工夫として、映画「アレクセイと泉」の上映、花園中ＰＴＡバンド演奏によるミニコンサートの実施など、これまでのシンポジウムになかったイベントを採り入れました。

今回の環境シンポジウム2003千葉会議のメーンテーマは『みんなで語ろう環境のこと』としました。皆様には、いまの地球規模の環境状況や日常生活における環境状態について「思いを語り・状況を知り・気づき自分ができることから実行する」を実践していただきますよう願う次第です。

基調講演については、昨年に引き続き、日本大学副総長で同大学生産工学部学部長である大谷利勝教授にお願いしたところ、快くご承諾を頂きました。

『持続可能な社会を目指してパート2・ディーゼル車の課題』との演題でご講演を頂き、現在の社会状況にマッチした演題でマスコミなどでは知り得ない面を、ディーゼル車の規制問題などについて、専門家の立場からきびしいご意見や、科学的な根拠に基づいた説明をされるなど、大変なご好評を頂くと同時に賛意を示す反響を頂くなど非常に良かったと思います。

最後に、5月から開催準備のためお骨折りいただきました実行委員及びスタッフの皆様、特に昨年に引き続き会場のご提供を頂きました日本大学生産工学部の皆様、快く御参加くださいました㈳千葉県環境保全協議会を始め多くの企業団体各位、その外ご後援をいただきました関係諸団体の方々、開催に賛助くださいました方々と諸団体に対し、厚くお礼申し上げます。私達は、これまで築き上げてきた四者のパートナーシップを基に『自然環境づくり日本一千葉県』を目指し微力ではありますが、その一端を担ってまいりたいと思います。

ポスターセッション
市町村の取組みについて

濱崎　稔（副実行委員長、千葉県環境政策課）

今年のシンポジウムでは、各分科会の内容や市町村・企業の環境保全への取組をポスターにまとめ、参加者に紹介するという試みを初めて行いました。まとめられたポスターは会場に掲示するとともに、１日目に各分科会の紹介、ポスターセッション説明（自治体・企業）で紹介をしました。市町村の取組は、79市町村すべてについて、また企業については、第８分科会で環境保全活動を発表する４企業の取組について、ポスターにまとめたところです。

このうち市町村のポスターは、平成14年版「千葉県環境白書」に掲載されている市町村の環境保全の取組を大きく、①環境学習活動、②温暖化防止・環境保全活動、③ゴミ問題、④公害防止、⑤条例整備の５項目に分類・整理し、各市町村に照会して最新情報に修正し、まとめました。その際、市町村からは活動写真の提供など協力をいただくとともに、実行委員会事務局にも大変な作業をしていただきました。

お蔭様で、市町村のポスターは、写真も貼り79市町村の状況が一覧に見られるように掲示されたため、熱心に見入る人、写真に収める人、メモをとる人など、多くの参加者の目にとまり、市町村のさまざまな活動を視覚で訴え、シンポジウムが市民・企業・大学などの他の主体との協働で行っていることを実感できる大きな効果があったのではないかと思います。この取組を提案していただいた実行委員会には、改めて感謝申し上げます。

これからの環境学習や環境保全活動は、本シンポジウムの趣旨である市民・企業・行政・大学のパートナーシップに基づいて行っていく必要があり、そのためには、お互いの活動を良く知る必要があります。また、地域からの活動を盛んにしていくためには、特に市町村の環境保全活動を知り、市民を始め各主体の連携の道を考えていく必要があります。本年７月に成立した「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」も、国民・事業者・民間団体の自主的な環境保全活動が促進されること、国や地方公共団体が連携・支援していくことに主眼が置かれています。来年度以降も、この取組を充実していくとともに、より多くの市町村職員の方に、シンポジウムへ参加していただきたいと思います。

アレクセイと泉を見て

杉本　恵美子

まず、映像の美しさに感動しました。それは村や森の自然の美しさと、村人の表情の美しさなのでしょう。次に感じたことは、これは国の違いだと思いますが、村人がとても宗教を重んじる人達だということ。無宗教の私ですが、神に祈るということが、こうして毎日生きていくことができることへの感謝の気持ちであることが少し分かった気がしました。村人のほとんどを去らせた放射能の汚染にも屈しなかった奇蹟の泉。そんな泉を大切にする村人達ならなおさらなのでしょう。

淡々と村人の日々の暮らしが進んでいくだけの映画なのですが、見終わってなつかしいような感動を覚えました。あーこれがきっと本当に生きるということなんだなーと感じました。シンプルに生きていくということがどれほど大事なことか、また今の日本には難しいことか思い知らされた気がします。けれどこの村がもう長くは続かないことを村人も感じており、100年後には泉も汚染されてしまうといいます。そのことに切なくなりましたが、心に染みるいい映画でした。

**********分科会報告**********

第１分科会　「地球温暖化！あなたはどうする」

広田　由紀江

今年のテーマは「地球温暖化！あなたはどうする」でした。倉坂秀史先生の講演、4人の事例発表の後にエコライフ、脱車社会、地域の温暖化防止活動と推進員の役割、新エネルギーなどのテーマに分かれてのグループディスカッションを行いました。今年は分科会だけで丸１日あり、温暖化問題にどう対処したらいいのか、これからどうなってしまうのか？実際の効果が目に見えないからこそ、継続が大切なのだと感じました。

「温暖化問題」も、今年で３回目。温暖化防止推進員の参加も多く、意欲に燃える１日となりました。

第２分科会　「ごみって何？」

副分科会長　森　登美子

第２分科会のテーマは、「ごみって何？」でした。身近な環境改善として、毎日出しているごみを見直し、自分の出来る範囲で、出来ることから始めてみることが、分科会としてのベースです。蛍光灯の処理・プラスチックごみの本質・バイオマスの可能性・建築廃材の処理というそれぞれの事例発表を通して「知り」ました。グループ討議では、ごみのイメージを語り合いながら、参加者の環境問題の意識を互いに認識し合い、意見をまとめあげていく方法を通して「拡げる」「仲間を増やす」方法を提案しました。そして、Ｄｏ（どう）「行動する」のかというヒントを持ち帰っていただけたのではないかと思います。さらに、その事を「続けて」いくことも。

第３分科会　「里山の保全」

第３分科会長　山田　英二

今年のねらいは、全国にさきがけ５月18日に施行された「里山条例」を知ってもらうこと。もうひとつは里山の「継続」した保全の進め方を学ぶことでした。午前中は基調講演の「里やま体験と人の感性と脳発達」、２つの事例報告、午後から「里山条例」、「水」と「生き物」

から見た里山、「継続」の３つのテーマに分かれて討論しました。

参加者からは、里山条例の精神を活かすためには県と市町村の連携が重要なこと、継続するためには、楽しみながら進めることや次世代につなぐ工夫としては、子供の里山体験が大切なことだという意見が多くありました。県内20団体・41名の参加があり、昨年にも増して活発な討論や交流などが進められました。

第４分科会　「川・沼・湿地は地域の力で守ろう」

鈴木　優子

参加者の関心は高く、瀧教授の基調講演、地域で問題解決に取組んでいる活動グループの事例発表後のパネルディスカッションでは、提案や質問の多い交流型の分科会となった。いずれも問題解決にはコミュニケーションが重要とされた。新しいグループを作るには、こんな話し合いが欲しかったなど、幅広い意見が出たのも、初めての参加者にも良かったと思われる。

終了後に早速、事例発表されたグループへの現地参加も計画され、関わった人同士の交流、現場のリーダーシップ、活動の輪の拡がり、深まりが生まれつつある。それぞれの活動が持続可能な水循環のどの位置に関わっているかを確認しあうことも大切に思われる。（委細、報告書）

第５分科会「表現力―環境学習アクティビティコンテスト」

第５分科会長　横山　清美

環境学習アクティビティプログラムの発表者とその評価をする参加者の皆さんが共に表現力を学習する場としました。まずはじめに分科会に応募してくださった５発表者がアクティプログラムを短い時間でプレゼンテーションしました。その後「究極の選択」という参加者の評価により、それぞれのアクティビティが参加者に選ばれ、発表者が体験を提供しました。この後、今年制定された「環境教育推進法（略称）」について環境省担当者から説明をしていただきました。この法律は、もう一つの所管である文部科学省からも説明を聞いてみたいと、引き続き分科会活動を続けていく必要性が参加者と共有され、発表者・参加者・運営スタッフが共に学びながら交流する一日となりました。

第６分科会　「地域の街づくりと環境の再生」

中岡　丈恵

この分科会は従来、街つくりをテーマにして進めて来ました。昨年より、大学が加わり大学、教授、学生，企業、市民、行政とのパートナーシツプで実行委員会を構成し、日大の越川教授が分科会長となり、楽しい中にもきびきびとした会を開催してきました。分科会の内容を決めるのに困るほど事例が多く、また私たちの学習できる良い部会でした。

分科会はミニシンポのスタイルで分科会の全体会では５つの事例発表、専門的な教授が担当する２テーマと市民３団体が担当する１グループ、３テーマに分かれて、それぞれに詳しい発表と意見交換会をいたしました。

市民活動のグループでは昨年またここでお会いしましようと！お別れした方からの成果報告をしていただいたり、新しく参加していただいた方、千葉県以外のかたからの活発な活動の報告があり、シンポの役割がすこし果たせたように思いました。

第７分科会　「はじめのいっぽ♪」

第７分科会長　小西　朝希子

第７分科会は、今年で３回目のまだ歩きだしたばかりの分科会で、大学生が主体となって企画・運営しています。今回は『はじめのいっぽ』をテーマに、環境のさまざまな活動に興味や関心がある人の、これからの活動のきっかけ――『はじめのいっぽ』――を踏み出してもらうと場づくりを行いました。

午前中はネイチャーゲームと環境団体の活動紹介、午後は『ゴミ』と『自然』の２グループにわかれてワークショップを行いました。他の分科会に比べ、参加者は少なかったのですが、そのために参加者もスタッフもお互い親密な関係が持てたと思います。はじめのネイチャーゲームで和やかな雰囲気づくりができました。ワークショップでの、『ゴミ』のグループはシンポジウム終了後も活動を継続しています。今回の会場であった日本大学の近くにある郵便局の跡地にエコステーションを建てる計画があり、その実現に向けて自分たちにできる具体的な案を出し合い、活動を進めています。

最後に、『私の宣言』と題して、参加者一人ひとりに今後の思いを発表していただきました。

第８分科会　「企業の環境保全活動」

石橋　源一

今回はじめてシンポジウムに参加し、企業における日頃の環境保全活動をパネルディスカッションの形式で紹介いたしました。

(１)新日本製鐵㈱君津製鐵所（回収された容器包装プラスチックを100%資源化する「コークス炉化学原料化法」の実用化）

(２)コスモ石油㈱（パプアニューギニア、ソロモンでの植樹や稲作の指導。地球規模での企業環境ボランティア）

(３)大日本インキ化学工業㈱（環境調和型製品の製造、工場における環境保全活動の具体的実例）

(４)（財）日航財団（航空機を使った対流圏でのCO_2継続的測定、航空機の軽量化、エンジン開発等の省エネ事例）

行政と市民と企業が相互理解を深め、それぞれの立場で何を成すべきか、あらためて考えさせられる意義深い二日間となりました。

H15第3回
エコサロン

「身近な」という視点から「流域」という視点へ

市川緑の市民フォーラム
事務局長　佐野郷美さん

今回のエコサロンの講師、佐野郷美さんが事務局長をしている「市川緑の市民フォーラム」は、1989 年環境ＮＧＯとして発足、市川市で自然や歴史、文化を学びつつ、市川市のよいところや市川市らしさを残した形で 21 世紀の街づくりしていきたいと、そのつど署名活動や行政への働きかけ、具体的な提案などをしてきた。佐野さんは、また市川市内の高校の生物教諭として、クラブ活動指導や身近な環境保全と幅広く活動されてきた。江戸川河口のヒヌマイトトンボやトビハゼを守る運動を続ける中で、それが利根川全体の治水計画の見直しにつながっていることに気づき、流域全体での取り組みを始めるにいたった経緯について熱く語っていただいた。

洪水のない町づくり、総合治水との出会い

フォーラム誕生間もない、1890 年市川市に奇跡的に残ったといわれる真間山斜面林でマンション建設計画があり、４万人署名を集めて許可寸前の計画を中止、保全を実現させた。この中で、多くの専門家や市民との出会いがあり、その後の活動につながっていく。

市川市は洪水が多く、1994 年真間川の拡幅工事が行われることになった。洪水のないまちづくりは必要だが、今までどおりの河川拡幅や遊水池でよいのだろうかと勉強を始め、「真間川の桜並木を守る会」との出会いがあった。

当時、建設省は都市型水害は今までのように雨を川に集めて一気に流してしまうというやり方では防げない、地中への浸透や貯水、遊水池などと川の拡幅を組み合わせた総合的な治水対策が必要との考えが主流になりつつあり、当時の建設省の方をお呼びし、市の方にも一緒に勉強していただいた。市川市でも、総合治水を取り入れて、川の拡幅と同時に林の保全、遊水池や貯水槽の設置、雨水マスの推進など総合的な治水対策が採られるようになった。

北方（ぼっけ）遊水池

真間川に流入する大柏川の中流域に 16ha（ヘクタール）の遊水池予定地がある。元来水田であったところだが、放置されている間に、ヨシ原、多様な湿地性植物、昆虫、多くの鳥と多様な生態系ができつつあった。遊水池として単なる塀に囲まれコンクリートだらけのものにしたくないとの思いで、全面を湿地や池、水田などの自然系にした具体的な提案を行った。そのなかの一部に許可を得て池を掘り、環境教育の場として活用しながらその自然回復の様子を記録するなどして、信頼も得られ、16ha 全面のほぼ提案どおりの自然系遊水池が決定し、現在県による工事が行われている。

江戸川放水路の可動堰の改修（移動、新設）問題

江戸川放水路河口には、上流部に潮が入ることを防ぎ淡水を保つことで農業用水や工業用水などを確保するための可動堰が設けられている。普段は締め切られているが、上流で大雨があったときは堰を開いて放水される。堰が老朽化し放水能力も不足しているので、170m上流部に新しい大型の堰を作りなおすという。最初に気になったのは新しい堰が作られる地点が現在ヨシハラで、そこに絶滅危惧種のヒヌマイトトンボがいること、下流域の泥干潟にいる北限のトビハゼや三番瀬などに与える影響であった。三番瀬や泥干潟は、現在でも大量の淡水が一時放水されることによりアサリなどに大きな被害があったといわれているので、大幅な放水量の増加が心配であった。

建設省に概要のきいたところ、放水量の元となる利根川治水計画は 1980 年に作られたものであり、200 年に一度の大雨に対応するためにまだまだ多くのダムや房総半島を横切る放水路の建設が予定されていることがわかった。1997 年成立の新河川法には、治水とともに河川の景観とそこに生息する生物に配慮することや地域住民と十分協議することと明記され、2000 年には河川審議会がこれからの治水計画は洪水を防ぐのでなく、洪水を許容する治水が必要との答申をしている。また、都市河川で適用されてきた上流で浸透、中流で遊水、貯水、下流で排水という総合治水の考え方は大河川にも通用することであり、新河川法と総合治水での利根川治水計画の見直しが必要ではないかと提案した。

流域シンポジウム開催へ

2003 年 2 月、突然「利根川治水計画」が見直しに入ったのでしばらくは現在の可動堰を修理しながら使用するという決定がなされた。新河川法での利根川治水計画の見直しは当然地域住民との協議が含まれる。

身近な自然を守るためには、実は利根川全体の取り組みが必要だと強く感じ、11 月 29 日には「江戸川－利根川流域シンポジウム 2003」を開き、利根川の上流域、中流域、下流域までの川にかかわる活動している市民が語り合う場を設ける。新利根川治水計画にはぜひ市民の意見を反映させたい。

質疑ではスーパー堤防、パートナーシップ、外環や堂本知事の環境施策まで広く意見が交わされた。中でもパートナーシップについて、「言うべきことはいい、やるべきことはやる中で信頼関係が生まれる。お互い切磋琢磨していくことが必要」と、長年の運動を踏まえての指摘はこれからの環パちばにとっても貴重な提言であるといえよう。

エコメッセちば2003

エコメッセは楽しいアイデアで協働へ

エコメッセちば２００３実行委員　横山清美

11 月９日(日)、ＪＲ海浜幕張駅前のシネプレックス後方の駐車場を会場に何とか雨にも降られず、6500 人の参加者にも恵まれ、企業、行政そして市民から 52 の出展団体が参加してのイベントとなりました。

2001 年からの県のイベント廃止の影響で、県予算もない、事務局もないエコメッセちば 2003 実行準備会の始まりでした。2003 を実行すべきかどうかもトコトン話し合い、実行委員会が立ち上がりました。

実行委員の中から事務局にも手を上げてもらい、実行委員一人一人が提案、企画、運営の３役をこなしてきました。企業・行政・市民はもちろんそれぞれの仕事や活動をかかえての２重３重の仕事になりましたが、後ろ向きになるどころか相手のメリットまでも考えて積み上げ式の柔軟な仕事をしてきました。

今年の売りは企業、行政の提案によるエコ車の試乗と木工体験でしたでしょうか。試乗車は予約制になるほど人気でしたし、手作りの立派な縁台を持った嬉しそうなファミリーのいくつもの顔に出会いました。この他にも、バウムクーヘンのパフォーマンスや着物のリフォームファッションショーや、環境紙芝居などアイデアいっぱいの出展団体に圧倒されました。

エコメッセ実行委員会にも初参加だった環パちばの加藤代表も、初めてのことに目を見張りながら自らも動く実行委員長でした。エコメッセが成功したのはみなさんがアイデアを提案するときに相手のメリットを考えて提案し相手がＯＫというまで待ったことで、自分なりに考えて自分で行動する、無言の協働だと思っています。ある実行委員は、このような関係が成熟した市民（社会）をつくるものだと発言されていましたが、そのとおりだと思います。

またエコメッセ 2004 実行委員会が結成（例年の５，６月）されたらそれに模様替えです。来年度の県のＮＰＯ協働事業としてもエコメッセちば 2004 が手を上げていますので、次回もご期待ください。

環パちば代表　加藤賢三氏の講演から

ホタルから見た高齢化社会と環境

10 月 22 日(水)千葉大学に於いて、「高齢化社会・環境情報センター」連続セミナーが開かれ、「環パちば」代表の加藤賢三氏のユニークなテーマの講演を伺った。

★ホタルもヒトも輝くまちづくりを目指して

都市化による谷津の開発･埋立地や休耕田の増加等により八千代市のヘイケボタルは激減している。また、農業従事者も高齢化し、基盤整備、農薬・肥料依存型農業が行き渡り、生活廃水による河川や沼の汚れからも生息地の自然環境が悪化している。

自生のホタルを残す取り組みは、ヒトの豊かな生活環境を維持・改善し次世代に残したい思いを込めたまちづくりへつながっている。

★協働事業で、八千代市をほたるの里に

里山や谷津の原風景を守ろうと、環境ボランティアグループ「八千代ホタルフォーラム」を設立し、体験を通じて自然から学ぶグラウンドワーク活動を心がけている。ホタルマップ作成や自然観察会・環境保全型農業の体験・よみがえれ花輪川プロジェクトとして掃除やビオトープづくり等の自然環境の保全に努め、環境についての意識やモラルが市民の中に根付き始めている。

また、市内の環境ボランティアが集い、交流する場として「八千代オイコス」を設立、「八千代市ほたるの里づくり」実行委員会の運営や市が実施する環境調査への協力･審議会での提言等､住民と行政が一緒になって力を合わせるパートナーシップ型の事業を実践している。

★市民参加の「しくみ」をつくろう

地域での様々な課題を解決するに、「八千代オイコス」が始めた NTT データーとの共同実験の地域情報ネットワーク「インターネット付箋紙」、あるいはコンセンサス会議のように、情報公開と市民参加により多くの英知を集める「しくみ」を作る必要がある。多くの人が自由にしゃべれる場で、より魅力的な街をつくるために市民や行政が何をなすべきかを話し合っていきたい。

地域からの発信１

『ホタルの里のビオトープ』

千葉県鎌ヶ谷市　ホタルの里を守る会　事務局　今井しのぶ

千葉県鎌ヶ谷市には『ホタルの里』という場所があります。昭和60年、市民有志によるホタルの保護活動が始まり、平成４年、当時もホタルが自然発生していたこの場所を、所有者の方々の御好意により市が借り受け、市民と共に『ホタルの里』として整備しました。平成９年には『ホタルの里を守る会』が発足。以来、会員による稲作りを主にした自主的な保全活動を続けてきました。

ところが里ができて 10 年を過ぎる頃から、このままでは活動を維持できない、ここを残していけなくなるのではないかという心配が生じてきました。これから先は、何とかしなければと手探りで取り組んできた『ホタルの里ビオトーププロジェクト』の話です。

問題の一つは会員の高齢化です。10年経ったということは、10歳年をとったということです。60歳で参加した会員は70歳になりました。加えてここは谷津田で、作業はとても大変です。でも谷津田だからこそ一年中水があり、ホタルの幼虫や餌の巻貝も生きていけるのです。

もう一つは利用者が固定していること。この場所は市が借りていますが、利用しているのはもっぱら当会の会員です。これでは「他の市民の理解が得られない」と、いつ、市に判断されても仕方がありません。限られた市民の場所というのではなく、もっと様々な市民が利用できるようにしたい。そのためには、稲作りの他に何かこれから先の柱になるようなものが欲しい。「良い所よ」とか「あそこ楽しいわよ」とか、そういう市民の声が、存続の力になるのだと思います。そのためにも、今後どう活用していくかを考える時期に来ていました。

利用者を増やすだけなら『観察会』という選択もありますが、私達は、もう一歩踏み込んでほしいと考えました。ぬかるむ土の感触や、足元から突然カエルが飛び出していく驚き。こういう楽しさ（？）を会員以外の人にも知ってほしい。それには、実際に作業を体験してもらうのが一番良いのではないか。体験すればこそ、見えてくるものがあるのでは、こうして「参加者がつくるビオトーププロジェクト」が動き出しました。

では、そもそもビオトープとは何でしょうか。本来は『地域の野生の生き物が暮らす場所』というような意味で、林や池、原っぱなど様々です。でもなぜか、ビオトープ＝池になりやすい。実は、私達もそうでした。ところが、船橋・市川近辺でつくられたトンボ池の多くは、アメリカザリガニ、ウシガエル、カダヤシなどの外来種に占有されてしまい、いつのまにかヤゴがいなくなってしまうそうで、また、池の管理も大変であるということでした。

だったら池ではなく、『湿地』は？。でも、ヨシが生い茂る場所を湿地に戻すなんてどうやって？。戸惑う私達に、市川自然博物館の金子謙一さんが教えてくれました。「ヨシの勢いをそぐために、繰り返しヨシを踏みつけるのです」。踏みつけることで土が柔らかくなって、水が地表面にしみ出てきます。また、ヨシに抑えられていた植物が勢いを取り戻したり、土の中で眠っていた種子が発芽してくる可能性もあります。「これならできそう！」聞きながらわくわくしてきました。

３月、全員でヨシを踏みました。途中、寝ぼけまなこのアカガエルがあちこちから飛び出してきて、歓声や悲鳴が上がりました。４月、柳の枝を挿し木しました。５月は里の周辺を含めた観察を中心に。６月にデッキを作り、７月に看板を立てました。デッキや看板の効果は大きく、その後、訪れる人が増えたのも嬉しいことでした。そして今年は、『水辺の植物と仲良くなろう』をキャッチフレーズに、見本園となるよう植物を植えてきました。

昨年のプログラムを終えて一息ついた頃、「あれで満足してるの？」と聞いてきた人がいました。確かに廃物利用のデッキ、手作りの看板、未整備部分と貧相かもしれません。でも私達は、満足するためだけにこのプロジェクトを実施しているのではありません。これをきっかけとして、ホタルの里や自然を愛する仲間が増えてくれたら。そしてここで感じたことを、それぞれの行動につなげてくれたら嬉しいのです。

※ビオトープの実施状況や他の活動については、当会のホームページで御覧になれます。
http://members.jcom.home.ne.jp/kamagaya-hotaru

地域からの発信２

リサイクル「かもめ」15 周年雑感

リサイクル「かもめ」御宿町　永島　輝代

リサイクル「かもめ」がスタートしたのは、1989 年の９月であった。顧みれば 15 年が経ったことになる。活動の発端は溜まる古紙を捨てずにリサイクルし、活かして行こうと言う単純な発想からであったが、当時は環境活動グループや団体の情報も地域では殆んど無く、リサイクルよりもゴルフ場やマンション建設に反対する運動等の方が多い時代だった。翌年、ブラジルのリオデジャネイロで第一回「地球環境サミット」が開催されることもあって、ゴミ問題を中心とした環境汚染が連日のように各メディアで報道、放映されるに及んで嫌が上にも関心を持たざるを得なかった。さて、我が家のゴミはどうなってるか案の定、燃やされる・廃棄されると言う現状であり、中でも古紙については惨澹たる有様、行政はひたすら焼却するだけであった。

我が地区の班の主婦達に話し、何とか助けて行こうと言う結論に及んで、定期回収に踏み切ることにする。「古紙リサイクル」情報は機関誌「かもめ」を通して、２年半の内に全町に拡がった。学校・事業所・企業にまで協力が得られ、参加者の数は増す一方であった。回収による還元金は運営活動の為の資金となり、余剰が出た時は福祉の為にも使われていった。環境活動は広報・啓発・学習、体験的実践活動にまで拡大され、特に子どもの為の環境活動は 1993 年に、小学生を中心とした「アースレンジャーJr.」を発足させ、三つ子の魂からの環境学習の展開として早や、10 年になる。その後、環境問題は水質・オゾンホール・酸性雨・地球温暖化・化学物質などエスカレートする一方である。そして町づくりと環境は切り離せぬテーマにもなっている。

15 年の流れの中でもっともショッキングだったのは、1997 年の日本列島を揺るがしたダイオキシンショックである。ひたすらゴミ減量化に取組んでいた我々にとって、忘れられない事件であった。こともあろうに、わが町が県下一の排出量と分かった時は大ショックであった。

行動を開始した私達は地域行政・県・国を相手にダイオキシンに向けて請願・提案交渉を、町内の団体とネットワークして市民達と展開した。分別の種類増量、ダイオキシンの発生源になるであろうプラスティック類の分別、リサイクル化を要求・・いま思うと良くやったわネ、と思うのである。しかしこの事とて、今だ解決している訳では無い。一団体の活動には限界もあるし、環境活動そのものが素早くメリットに繋がるものでは無い。15 年ごときと言われるだろうが、しかし、15 年なのである。ひたすら、続けねばならない事を頑張って続けているに過ぎない。私には近頃使命感さえ感じているが、不自由な身体がどこまで持つだろうかナっと、思ったりもしている。

総務部より
運営委員会だより

10 月運営委員会（10 月 24 日）

１．今後の参加行事
- 「エコメッセちば 2003」出展（11 月 9 日）
- 11 月の千葉大学「高齢化社会・環境情報センター利用者会議」

２．事業部
- 「環境シンポジウム 2003 千葉会議」参加の報告
- 「エコメッセちば 2003」の企画の検討
- 1 月エコツアーの企画の検討

３．「だより」34 号の企画の検討

４．「ちば NPO 地域フォーラム」
（16 年 1 月 17 日　大網白里町）の
「食・農と環境」の企画参加の検討

****

11 月運営委員会（11 月 21 日開催）

１．今後の参加行事
- 「地球温暖化防止活動推進員に対する研修事業」
- 「ちば NPO 地域フォーラム」の第 1 分科会「食・農と環境を考える」
- 12 月の千葉大学「高齢化社会・環境情報センター利用者会議」

２．事業部
- 「エコメッセちば 2003」参加の報告
- 事業の課題、運営委員会の人員拡充、各種助成金申請の検討
- LOVE OUR BAY 募金の交付報告（16 年度事業として印旛沼水質浄化のためのアダプト制度の調査）

３．「だより」34 号の作成状況の報告

４．メーリングリストの作成の検討

５．各種研修会参加の検討

お知らせコーナ

★エコツアー「風力発電と海の文化の街　銚子」
ー環境パートナーシップちば主催事業-
日　程：2004年1月23日（金）
集　合　9時30分　千葉駅前大道り,NTT前
JRバスがお待ちいたしています。
解散　16時の予定
参加費：3500円・バス代,昼食代込みです
銚子の町には伝統的な海の文化と歴史が有ります。期待の風力発電の現場と古い町を訪ね、まるごと銚子を感じませんか・・・！
皆さんとの親睦も兼ねてご参加ください。
申し込み：メールまたは葉書でお願いします
E-mail：naka,hta@trust.ocn.ne,jp　（中岡）
〒270－2203　松戸市六高台４－154　中岡ともえ

☆ ちばNPO地域フォーラム
日　程：2004年1月17日（土）AM10時～PM４時
場　所：大網白里保健文化センター・中央公民館
基調講演：堂本暁子千葉県知事
「土と水と人、そしてＮＰＯ」
ＮＰＯ活動推進特区大網白里からの発信
第１分科会「食・農と環境を考える」を「環パちば」加藤代表が担当します。その他教育、福祉、アート、里作りなどのNPO、小、中、高校生の発表など。
申し込み、問い合わせ：NPO法人ふるさとネッツ
Tel＆Fax：047-361-6557
E-mail：furusato-n@sselega.or.jp

★ 千葉県環境研究センター公開講座
開催日：12月13日（土）13:30～16:30
会　場：千葉県環境研究センター
｛最寄り駅：JR五井駅、バス：五井駅西口□乗車口13:05発姉ヶ崎西口行き(玉前西一丁目下車10分)｝
（駅正面乗車口の姉ヶ崎行きは通りません）
内容：「物質循環の実現に向けて」
～地球温暖化ワークショップ～
募集人数：100名（申込先着順、参加費無料）
申込・問い合わせ先
千葉県環境研究センター（市原市岩崎西1-8-8）
Tel 0436-24-5309　FAX 0436-23-3598
e-mail kankyoken@ma.pref.chiba.jp
ＨＰ：http://www.wit.pref.chiba.jp/
[公開講座の今後の予定]
・平成16年1月28日(水)13:30～16:30
会場：千葉県庁本庁舎（１階多目的ホール）
内容：各分野研究の成果をわかりやすく説明します

☆ 第4回「ちば環境再生基金」公募助成
県民自らの手で貴重な自然を保全するとともに、ふるさと千葉県の環境を再生する自発的・継続的な活動を支援するため、公募方式により事業を募集し、ＮＰＯが千葉県内で行う活動に対し経費の一部を補助します。
受付期間　2003年12月1日(月)～12月26日(金)
問い合わせ：千葉県環境財団環境再生基金チーム
TEL：043-246-2078（代）FAX：043-246-6969
E-mail： saiseikikin@ckz.jp
HP：http://www.ckz.jp/saisei/npo/

★ 「三番瀬再生計画素案」に対する意見募集
募集期間　2003年11月19日(水)～12月18日(木)
募集方法　意見応募用紙に記入の上、下記の送付先に、郵送、FAX、メールのいずれかでお送り下さい。
送付先（問合せ先）
〒260－8667　千葉県総合企画部政策調整室
三番瀬プロジェクトチーム
TEL ： 043-223-2439　FAX ： 043-224-9026
E-mail： sanbanze@mz.pref.chiba.jp
ホームページ
http://www.pref.chiba.jp/syozoku/b_seisaku/sanbanze/soan/contents.html

☆ 広報部より
1. 皆様の活動やお知らせなどの原稿をお寄せください。
2. ホームページに団体のリンクや連絡先としてメールアドレス等の記載をご希望の方はご連絡ください。
広報部連絡先　FAX：047-450-8468（佐藤）
E-mail：motosato@pop07.odn.ne.jp
HP：www.geocities.co.jp/NatureLand/4632/

古紙100%再生紙使用

「環境パートナーシップちば」は、環境活動の推進と充実を目指し、千葉県内の環境市民のゆるやかな連帯のもと、相互の情報交換と交流を深め、行政および専門家とのパートナーシップによる活動の展開を図ることを目的としたネットワークです。
申込先：千葉県環境財団　環境技術部
環境啓発ﾁｰﾑ気付
TEL:043-246-2180　FAX:043-246-6969
会費納入先：環境パートナーシップちば
郵便振替口座　00160-9-401872
http://www1.u-netsurf.ne.jp/~kanpachi/

千葉県環境財団環境技術部環境啓発ﾁｰﾑ気付

＜環境パートナーシップちば＞
入会申込書
会の趣旨に賛同し（個人、団体、賛助会員として）
会費を添えて入会します

氏 名		入会年月日	
住 所	〒		
ＴＥＬ		ＦＡＸ	
年会費	個人1,000円　団体2,000円　賛助会員5,000円		